銅鐸文様の起源

設楽　博己

要旨　初期の銅鐸の文様が弥生前期の土器の文様と類似していることから、銅鐸の製作開始が弥生前期にさかのぼることが指摘されてきた。しかし、近年出土した菱環鈕1式銅鐸の鋳型が弥生中期前半の土器と共伴したという定点にもとづき、銅鐸の生産を弥生中期以降とする見解が提示された。この問題を考えるうえで重要なのが、大阪府茨木市東奈良遺跡から出土した銅鐸である。本稿ではこの銅鐸の楕円文などを分析し、それを含めた銅鐸の文様の多くが縄文晩期の土器の文様を起源とすることを指摘し、東奈良銅鐸が最古の銅鐸に位置づけられることを論じた。このことは、銅鐸の成立が弥生前期にさかのぼる説を支持するとともに、大陸系の文化を代表する銅鐸に縄文系の文化要素が強く関与していることを示す。弥生文化形成の多元的あり方は、西日本といえども縄文系文化との関係性のなかでとらえていかなくてはならないことを指摘した。

はじめに

銅鐸の起源に関しては、年代や系譜などさまざまな方向から議論が進められてきた。共伴した遺物にもとづく年代論、銅鐸に施された文様の分析などがそのおもなものだが、いずれも問題がある。伝世された銅鐸の場合、共伴した遺物の年代が銅鐸のつくられた年代を示すわけではない。また、銅鐸文様の起源を土器の文様に求めた場合、土器の文様の年代が必ずしも銅鐸の年代と一致するわけではないことが問題になる。なぜならば、土器の文様が木器などに転写される一方で、土器ではその文様が廃止されたのちに、木器などから銅鐸に取り入れられた場合が考えられるからである。

銅鐸の起源をさぐるうえで、大阪府茨木市東奈良遺跡から1999年に出土した銅鐸（奥井・横山編2003：101）は、注目に値する。この銅鐸を分析した森田克行は、最古の銅鐸ではないかと考えている（森田2002）。しかし、この銅鐸は上に述べたようないろいろな点で扱いがむずかしく、その考えに否定的な意見も目立つ。筆者は森田説を支持する立場から、東奈良銅鐸について若干の考察を加えたことがある（設楽2009a：197-199・2009b：89-93・2013）。

そこで、その後の筆者の観察もまじえながら東奈良銅鐸の特徴を整理し、森田の観察結果と考えをまとめたうえでそれに対する研究者の見解を見渡す。そして、この銅鐸の文様の祖形を縄文土器の文様に求めて東奈良銅鐸の製作年代を論じ、東奈良銅鐸を含む古い銅鐸の文様と土器の文様を比較しながら、そこにどのような継承関係と歴史的な意義があるのか考えてみたい。

1　東奈良銅鐸をめぐって

東奈良銅鐸の特徴　東奈良銅鐸（図1）は、最大高14.5㎝、身の高さ12.0㎝で、鈕の高さが2.5㎝である。総高に対する鈕高の係数（鈕高÷総高×100）は17.2である。朝鮮式銅鈴[1]が13.7～

18.5 であるのに対して、菱環鈕式銅鐸が 18.0 ～ 25.63 であるので、鈕高係数からすれば朝鮮式銅鈴の範囲に入っている。あわせ目の甲張りはない。

鈕の断面は楕円形をなしている。舞は鈕をはさんで両側ともに傾斜している。型持たせの孔は舞と身にあるが、いずれも中央に位置する。表面にあいた鐸身の型持孔は片面に認められるだけだが、反対側の内面を観察すると湯が回らずに貫通しなかった方形の型持の存在を観察することができる[2]。内面の下位に突帯があるが、裾の部分よりやや上に位置する。突帯の上端部はすりへって、平坦になっている。突帯の下部の方が上部よりもよく減っており、磨滅は突帯の下側の裾端に及んでいる。これは、舌の当たる回数が多かったこと、すなわち使用が長期にわたったことを推測させる。

文様はすべて横帯文であるが、両面とも型持孔のある無文帯をはさんで上下に分かれている。A 面[3]は、上段が縦方向の有軸羽状文、下段が重三角文を交互に 2 段に配した文様帯で、上下は半単位ずらしているので重菱形文のようになっている。B 面は、上段が楕円文で文様帯の下に下向きの三角文を並べている。下段は縦方向の有軸羽状文である。いずれの面も、下辺横帯に陰刻の波状文を配置する。文様の突線は太く、楕円文や三角文などが浮彫り風に面をなしているのが特徴である。

東奈良遺跡は弥生前期の溝を中心とした遺構が検出された集落であるが、銅鐸が出土した第 1 調査区の SD － 5 という溝は、弥生中期中葉から後半とされている。銅鐸は溝の底から、鐸身を上に

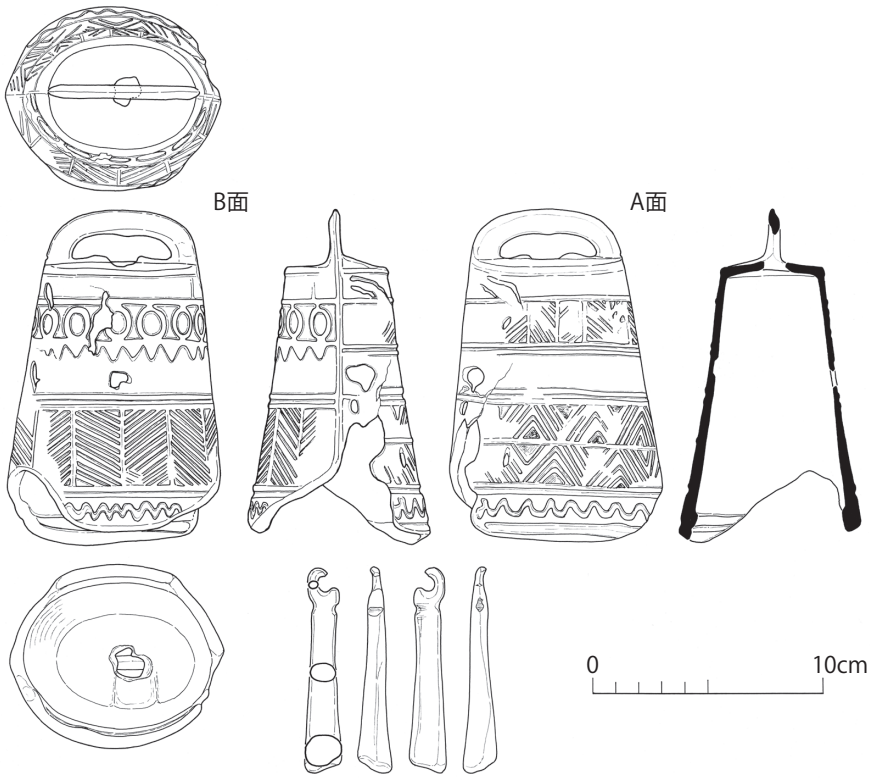


図 1　大阪府茨木市東奈良遺跡出土銅鐸

して横になった状態で出土した。銅鐸の中には、長さ 8.9 ㎝の舌が伴っていた。

森田克行の見解　森田の東奈良銅鐸の年代と製作地に対する結論は、摂津第Ⅰ様式期に摂津の三島地方で製作された、というものである（森田 2002：175-176）。これは、おもに文様の分析から導かれた。東奈良銅鐸にみる形態的特徴を朝鮮式銅鈴や菱環鈕式銅鐸と比較した森田の結果は、以下のとおりである。朝鮮式銅鈴はすべて無文であるのに対して菱環鈕式銅鐸はすべて有文なので、まずは形態と製作技法の点から整理していくことにしよう。

図 2 は、朝鮮式銅鈴と東奈良銅鐸、菱環鈕 1 式銅鐸を、縮尺を統一して並べたものである。朝鮮式銅鈴と菱環鈕 1 式銅鐸を比較した場合の大きな違いは、文様の有無を除くと、まず型持孔の位置と数があげられる。朝鮮式銅鈴の鐸身の型持孔は両面の中央に 1 孔だが、銅鐸は 2 孔並んでいる。朝鮮式銅鈴で側面に存在している孔は銅鐸にはない。

全体の大きさと、それに対する鈕の高さの違いも顕著である。菱環鈕 1 式銅鐸に比して朝鮮式銅鈴は総じて小さく、総高に対して鈕の高さが低い。東奈良銅鐸は、菱環鈕 1 式銅鐸のいずれよりもひとまわり小さく、朝鮮式銅鈴のうち韓国合松里銅鈴（図 2-4）を除いたいずれよりも大きいが、総高と鈕幅に対する鈕高の比率が著しく小さく、朝鮮式銅鈴と近似している。

そのほか、東奈良銅鐸が菱環鈕 1 式銅鐸よりも朝鮮式銅鈴に近似しているのは、鈕の断面形が楕円形であることや、側縁部に甲張りが一切なく鰭を欠いていること、内面突帯は下端のやや上位にあり、菱環鈕式銅鐸（図 18）よりも朝鮮式銅鈴の位置に近いことなどである。

これらはいずれも、東奈良銅鐸が朝鮮式銅鈴と菱環鈕式銅鐸の中間的特徴をもっていることを示している。森田は朝鮮式銅鈴を宇野隆夫の分類（宇野 1982）にもとづいてⅠａ類、Ⅰｂ類、Ⅱａ類、Ⅱｂ類に区別し、その順に変化すると考えているが、東奈良銅鐸に近いのはⅡａ類の韓国入室里銅鈴や大分県別府銅鈴（図 7-2）であり、Ⅰｂ類の合松里銅鈴が東奈良銅鐸よりも古いと積極的にいえない点のあることから、東奈良銅鐸は韓国槐亭洞銅鈴（図 7-1）に代表される朝鮮式銅鈴Ⅰａ類を親とするⅠｂ・Ⅱ類と二卵性双生児との見方を示した。そして、菱環鈕式銅鐸に先立つ銅鐸の型式名称として、「楕円環鈕式銅鐸」を提唱した。

文様に対する考えは、以下のとおりである。

菱環鈕式銅鐸は、どれもみな鈕に文様があるが、東奈良銅鐸はそれを欠いている。菱環鈕式銅鐸の文様は直線を基調としていて東奈良銅鐸も直線文はみられるが、曲線を基調とした文様は東奈良銅鐸に限られる。問題は曲線を基調とする文様の祖形がどこに求められるかであるが、森田はそれを弥生土器の文様を写したものと考えた。

そのうちのひとつ、陰刻波状文は大阪府高槻市安満遺跡のⅠ－２様式、つまり弥生前期の土器の陰画波状文を構成する、朱彩によって上下交互に施した連続山形文（図 3-1）がもとになっているとみなした。これが、東奈良銅鐸の製作年代を弥生前期後半にさかのぼらせた理由である。土器の陰画波状文は三島地方に限られるので、この地方が東奈良銅鐸の製作地だとみなした。

もう一つの曲線文である連続楕円文は弥生土器に適当な資料がなく、出自については保留せざる

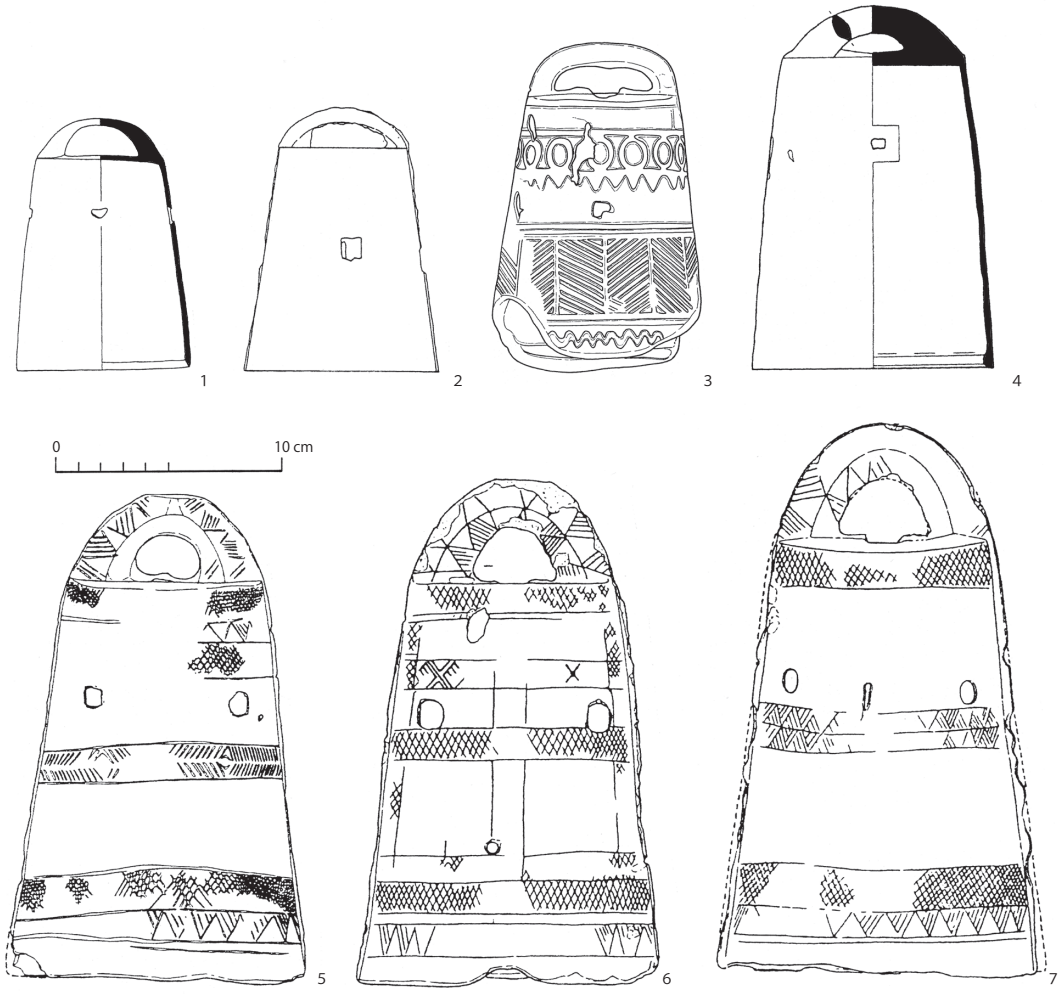


図２　朝鮮式銅鈴と楕円環鈕式銅鐸・菱環鈕１式銅鐸

１：槐亭洞１銅鈴、２：別府銅鈴、３：東奈良銅鐸、４：合松里銅鈴、
５：神庭荒神谷５号銅鐸、６：東博 35509 号銅鐸、７：中川原銅鐸

をえないとしている。

朝鮮式銅鈴と菱環鈕１式銅鐸の大きさ、総高に対する鈕の高さなどに注目すれば、森田が分析したように、東奈良銅鐸を介在させた朝鮮式銅鈴の最古型式である槐亭洞銅鈴と菱環鈕式銅鐸の最古型式である島根県出雲市神庭荒神谷５号銅鐸の形態と製作技術的な連続性は明快である。菱環鈕式銅鐸の型持孔が独自化したのも側縁の型持孔を失念したためであり、形がいびつで文様の割り付けが甘いことも含めて、未熟な段階に製作された銅鐸、まさに最古の銅鐸という位置づけは森田の分析のとおりだと考えてよい。

森田説批判　森田説を最もつよく批判したのは、寺沢薫である。東奈良銅鐸は、総高や鈕高係数、鈕の断面形態、型持孔の位置などいずれも朝鮮式銅鈴の範疇に属する一方、内面突帯の位置は菱環

鈕式以降の銅鐸の範囲内であり、東奈良銅鐸が菱環鈕式の先行形態とは言いがたいことを指摘した（寺沢 2010：244–245）。銅鐸の祖形である朝鮮式銅鈴は、宇野のⅠ類ばかりでなくⅡ類も射程に入れるべきだから、弥生後期にそれを模倣する機会は存在していたので、模倣を前期にさかのぼらせる前提が崩れているという。

しかし、東奈良銅鐸が朝鮮式銅鈴と菱環鈕 1 式銅鐸の両者の特徴をあわせもっていることは重視すべきであろう。内面突帯も菱環鈕 1 式銅鐸よりは下がった位置にあり、過渡的な様相を示す。さらに寺沢が反論としてあげた文様描出や割り付けの未熟さも、森田が指摘するように最古の銅鐸ならではの特徴と言えるのではないだろうか。菱環鈕 1 式銅鐸の文様構成にスムーズにつながらないのは、菱環鈕 1 式の最古型式である荒神谷 5 号鐸がかりに中期初頭であるとすれば、それに至るまで間にまだ数個体介在している可能性が理由として考えられよう。

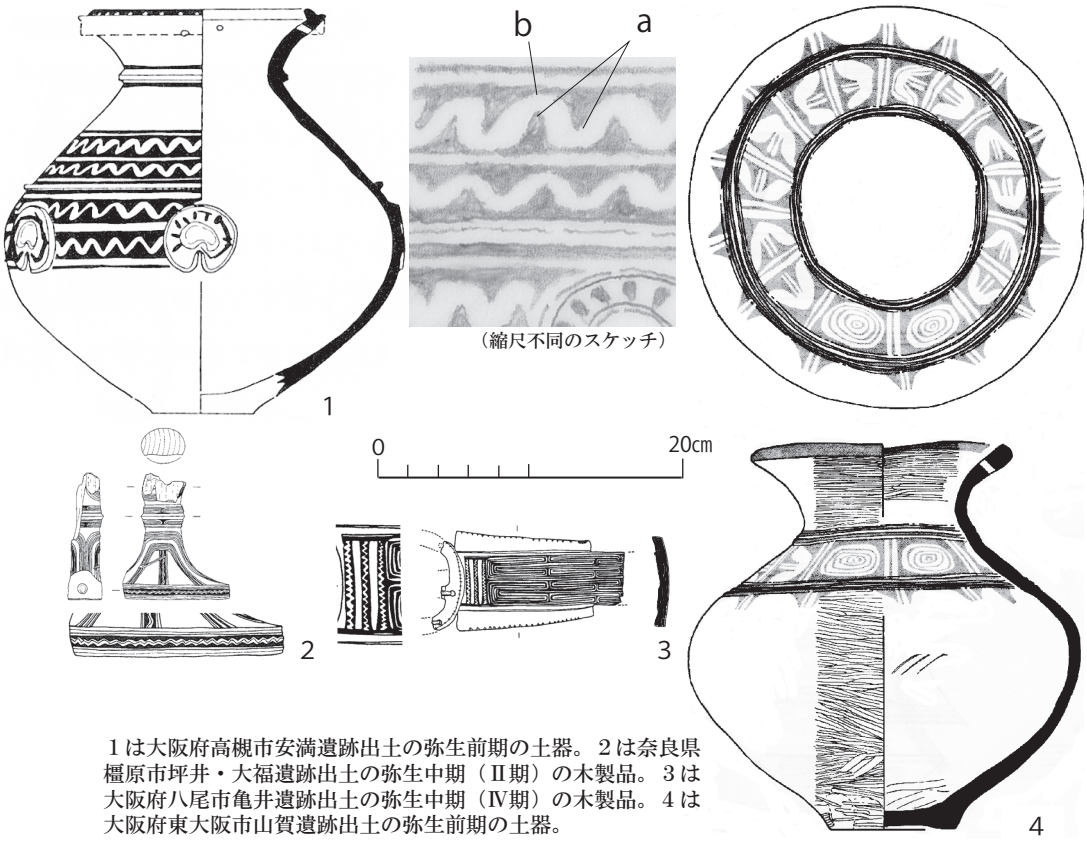
井上洋一は、東奈良銅鐸は「舞の肩が下がり、側面から見た身の内反り、そして横帯文系の文様で飾られるという点などは銅鐸の特徴を備えたものであって、そこから菱環鈕式（Ⅰ式）への型式的変遷には問題が残り、これをにわかに銅鐸の祖形とするわけにはいかない。」として、「朝鮮系小銅鐸」としている（井上 2011：232）。難波洋三も、身の反り具合が菱環鈕 2 式以前とは考えられないとした（難波 2006）。あらためて実測をしてみると、裾の開きが最古段階の菱環鈕式銅鐸よりは強いものの、身の反り具合は公表されている実測図よりも弱いようである（図 1）。また、福岡県津屋崎町勝浦高原遺跡や熊本市八ノ坪遺跡から出土した鋳型のように、朝鮮式銅鈴にも舞に傾斜をもつ例があり（春成 2008:69）、舞の平らな神庭荒神谷 5 号銅鐸や東博 35009 号銅鐸などとは別に、舞が傾斜した中川原銅鐸のような製作系列が存在している可能性もある。ただ、寺沢が指摘した朝鮮式銅鈴との比較などを含めて、形態的、技術的な特徴から銅鐸祖形論を展開するのはまだ解決すべき問題があるといってよいだろう。

文様の面からも、寺沢が批判を加えている。安満遺跡の弥生第Ⅰ－２様式土器の文様に類例を求めた陰刻波状文も、弥生Ⅱ期の奈良県橿原市坪井・大福遺跡（図 3–2）やⅣ期の大阪府八尾市亀井遺跡の木製品（図 3-3）の文様に類例があることや、弥生Ⅳ期が盛行期である外縁付鈕 1 式の井向 1 号銅鐸に陰刻波状文が引き継がれていることなどから、東奈良銅鐸はもとより銅鐸の鋳造自体が前期にさかのぼることはないとした（寺沢 2010:246-248）。

２　東奈良銅鐸文様の祖形

森田が問題にした安満遺跡の土器の文様（図 3–1）を観察した結果、東奈良銅鐸の陰刻波状文と同じテクニックで描かれていることを確認した。そのことから述べていきたい。続けて、楕円文と有軸羽状文について論じる。

波状文（図 1・3）　安満遺跡の波状文は、赤彩により鋸歯文あるいは三角文を交互に描いているので、そのなかの塗り残した部分が結果的に波状になっている（図 3-1 右）。三角文の頭はとがる



１は大阪府高槻市安満遺跡出土の弥生前期の土器。２は奈良県橿原市坪井・大福遺跡出土の弥生中期（Ⅱ期）の木製品。３は大阪府八尾市亀井遺跡出土の弥生中期（Ⅳ期）の木製品。４は大阪府東大阪市山賀遺跡出土の弥生前期の土器。

図３　波状文と彩文

場合（a）もあれば少し丸みをもたせる場合もあるが、三角文の頭に対向する部分、すなわち三角文と三角文の間は丸くカーブをもたせており（b）、コンパスによって連続して描かれた弧線に近いのが特徴である。これらの特徴は、まさに東奈良銅鐸の波状文と一致している。銅鐸では陰刻の波状文となっているが、土器では三角文を強調して赤く塗られたので陰画波状文になっているのである。鋳型に文様を彫り込むときに、赤く塗られた三角部分が意識されて彫られた結果であろう。

この文様が弥生Ⅱ期あるいはⅣ期の木器に引き継がれているのは、寺沢が指摘したとおりかもしれない。しかし、それらはもはや委縮した飾りにすぎず（図 3-2・3）、上でみた原則的な部分が弥生前期の土器の文様と一致しているのは、東奈良銅鐸の文様の古さを物語っている。

先端がとがり、土台の部分が丸くなる文様モチーフは、安満遺跡の例を含めて弥生前期の土器や木器にしばしば見られるベンガラなどで描かれた彩文に認められるが（図 3-4）、それら直線と弧線からなる文様は、後に述べる木葉文の原形としての三田谷文様あるいは東北地方の縄文晩期の土器文様に由来する。

三田谷文様は、島根県出雲市三田谷Ⅰ遺跡から出土した土器によって名づけられた意匠である（岡

田 2000：83)。三田谷文様と共通の文様モチーフは、亀ヶ岡式土器に特徴的な三叉文の分布範囲の外郭である北陸地方で縄文後期終末～晩期前半の八日市新保Ⅰ式や御経塚式 1 ～ 2 式土器に流行した文様であったが、なぜか晩期終末に復活し、西日本一帯に広まった（図 4）（設楽 2004：202–203)。

楕円文（図 1・6）　問題は森田が系譜を棚上げした楕円文である。筆者は、この元になる文様を東日本の縄文系土器の文様に求めた（設楽 2009a：198・2009b：91–92)。それは、浮線渦巻文土器と呼ばれる一群の土器の文様である（図 5)。

浮線渦巻文土器は、長野県域から愛知県域、石川県域など中部地方の縄文晩期終末～弥生前期にみられる土器である。その起源となるのは東北地方の縄文晩期、亀ヶ岡式土器の大洞Ａ$_1$式の文様である（図 5–1)。それが新潟県域や長野県域で改作され、大洞Ａ$_1$式の後半にあたる時期に浮線渦巻文土器として成立する（図 5–2)。長野県域の南部や愛知県域、石川県域には大洞Ａ$_2$式になってから広がるようである（図 5–3)。この時期は、遠賀川式土器がすでに近畿地方や東海地方に定着して、東日本の縄文土器あるいは縄文文化の系譜を引いた弥生土器と接触交流する時期であった（表 1)。

浮線渦巻文土器も長い変遷をたどって刻々と変化しているようであるが、渦巻文あるいは楕円文を横に連ねていくスタイルは終始一貫している。古い段階では渦巻文が何重にも巻いていたが、終末に近づくと渦巻は形骸化して二重程度の単純な楕円文になる。石川県小松市八日市地方遺跡の渦巻文 — 楕円文土器（図 5–4, 図 6–2）は、一部に渦を残すその段階のもので編年的な位置づけは、

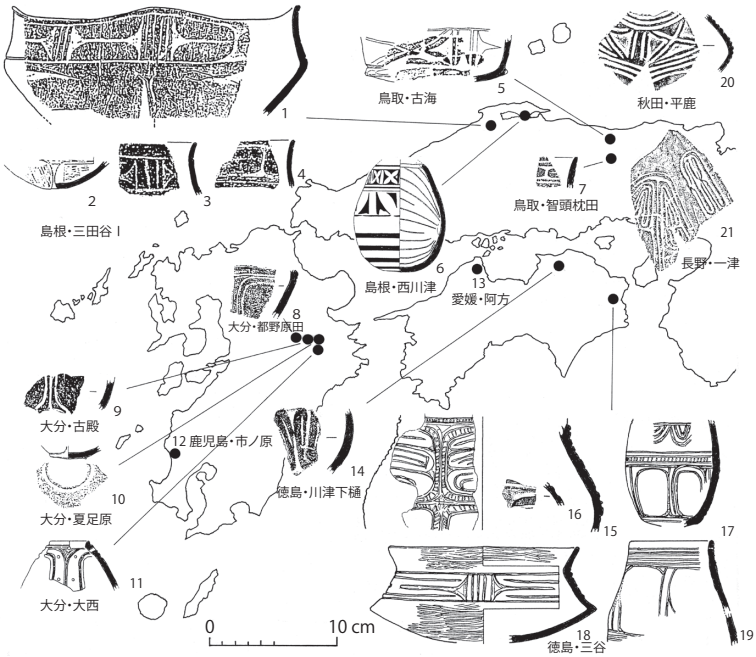


図 4　中国地方以西の三田谷文様と関連資料（右上 2 点）

おそらく遠賀川式土器の中段階～新段階の古い部分に相当すると思われる（湯尻 2011：22）。

東奈良銅鐸の楕円文（図 6-1）と八日市地方遺跡の楕円文（図 6-2）を比較してみよう。東奈良銅鐸の楕円文の特徴は、①楕円は上下に長い、②横帯で区画された中に横に連続して施される、③楕円文は上下の区画線に接する、④楕円文どうしはやや離れて配置される、⑤楕円の縁どりはたんなる線ではなく、幅の広い突線である、⑥楕円文と楕円文の間は、幅の広いＩ字形の彫り込みになっている、という点である。いずれも八日市地方遺跡の楕円文の特徴に合致している。

このうちの⑥は、土器の方ではしつこく何度もヘラで引いたり、なでつけてえぐり込むようにしている。この構図と技術は三田谷文様と共通し、愛知県春日井市松河戸遺跡のヒョウタンに施された渦巻文（図 6-3）とも合致している。

有軸羽状文（図 1・7）　八日市地方遺跡の土器には、有軸羽状文を縦に配置した文様もみられる（図 7-2）。これは北陸地方の弥生前期後半の柴山出村式土器の特徴であり、それに先立つ縄文晩期終末の乾式土器に定着していた文様である（図 7-3）。これが、北部九州の弥生早期の夜臼式土器の文様と関係があるのではないかという鈴木正博の意見がある（鈴木 2003：20）。八日市地方遺跡の土器の軸線は二条だが、福岡市藤崎遺跡の板付Ｉ式土器の軸線も二条であり（図 7-1）、鈴木の理解を補強する資料であろう。

東奈良銅鐸の有軸羽状文は、縦に施されている。そのために文様帯の幅は広く、銅鐸の一般的な

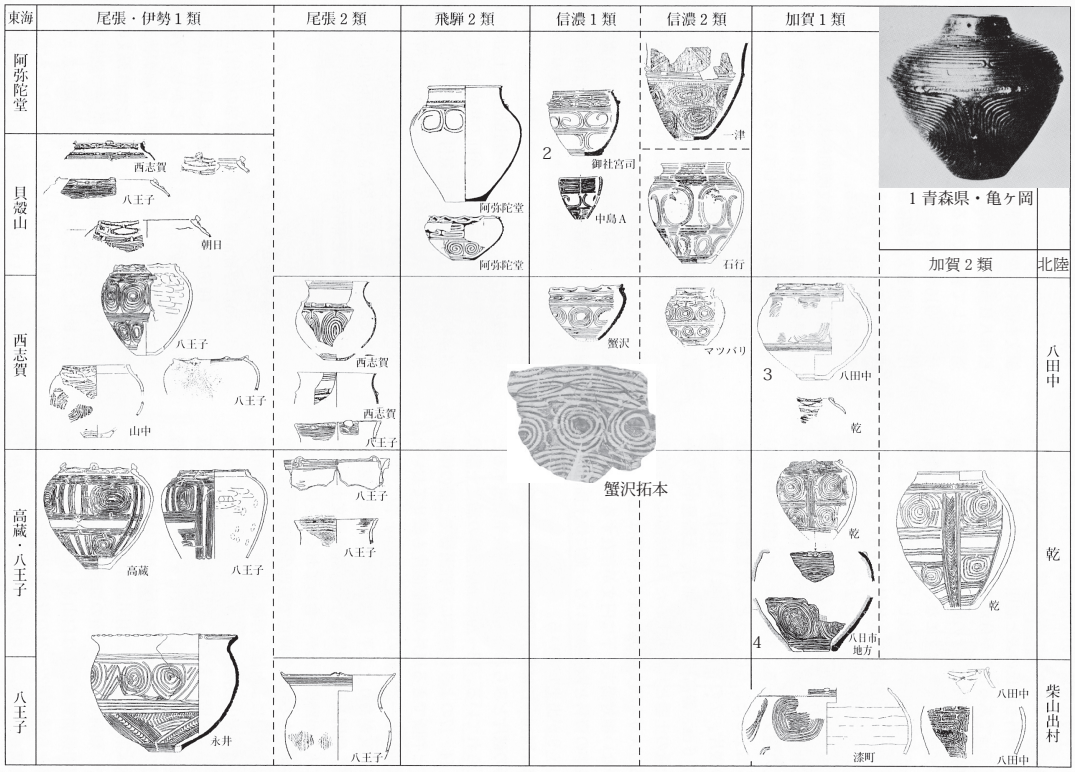


図 5　浮線渦巻文土器の編年

表 1　縄文晩期～弥生前期の土器編年

	近畿地方	東海地方	中部高地地方	東北地方
縄文晩期	船橋式	五貫森式	女鳥羽川式	大洞 A1式
弥生前期／縄文晩期	遠賀川式古・長原式	馬見塚式	離山式・氷Ⅰ式古	大洞 A1・A2式
弥生前期／縄文晩期	遠賀川式中・水走式	遠賀川式中・樫王式	氷Ⅰ式中・新	大洞 A ´式
弥生前期	遠賀川式新	遠賀川式新・水神平式	氷Ⅱ式	砂沢式

文様帯のあり方と大きく異なっている。八日市地方遺跡の柴山出村式土器の有軸羽状文が縦位であることを考えると、こうした文様が元になっている可能性が高い。銅鐸通有の文様から外れることと、それが縄文土器の文様の影響を受けたものであることから、この文様の古さがわかる。

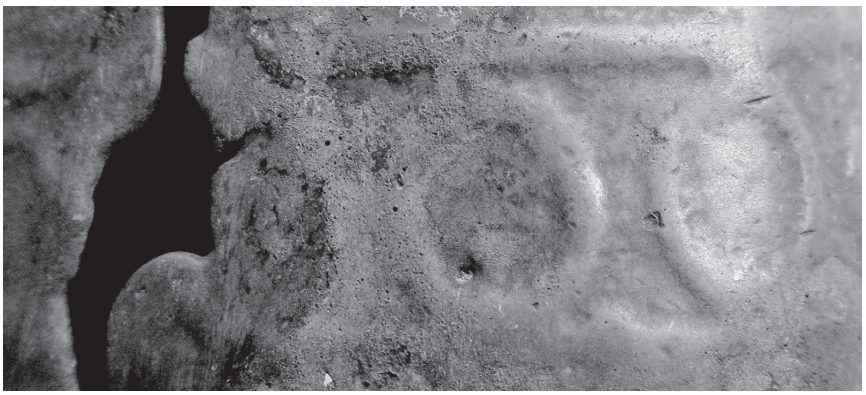
重菱形文（図 1・8）　東奈良銅鐸 A 面の重菱形文に類似した文様は、交互に連なる重三角文を上下に反転させて出来上がったものであるが、反転部の線を取り去れば重菱形文となる。重菱形文は、東博 35509 号銅鐸の上位（図 8-f）および愛知県清洲市・名古屋市朝日遺跡から出土した銅鐸の鋳型に認められる。

朝日遺跡の銅鐸鋳型の出土を契機として重四角文の祖形解明に取り組んだ春成秀爾は、八日市地方遺跡から出土した木製杵に施された重菱形文を祖形とみなした（春成 2008：71）。朝日遺跡の銅鐸鋳型は小さいこともあって欠損部以外が不明であるが、線刻は立体的ではなく製品の仕上がりも扁平な線で構成されることが予想される。それに対して東博 35509 号銅鐸は四角形に挟まれた三角形の部分が抉られており、e にもその手法が確認できる。これは東奈良銅鐸の重菱形文の三角形部部分と同じテクニックによるものである。東奈良銅鐸のモチーフは重菱形文の間を貫いて一本の横線があることと、文様を構成する線の数が東博 35509 号銅鐸よりも数本多くより複雑であることなど、型式学的にみてより古いといえよう。

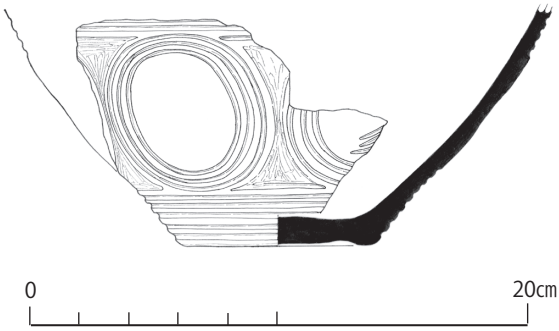
重菱形文は東奈良銅鐸を祖形として朝日遺跡の銅鐸鋳型まで継承された文様モチーフであり、その過程で木器にも施されたのではないだろうか。神庭荒神谷 5 号銅鐸の羽状文の反転部分も重四角文の中央部と同じ構成になるが、やはり抉られていて古相を示す（図 8-c・d）。朝日遺跡の銅鐸鋳型の時期である中期前半までの間に重菱形文が大きな変化を重ねたことを物語っているようであり、このモチーフが弥生前期にまでさかのぼる可能性は否定できない。

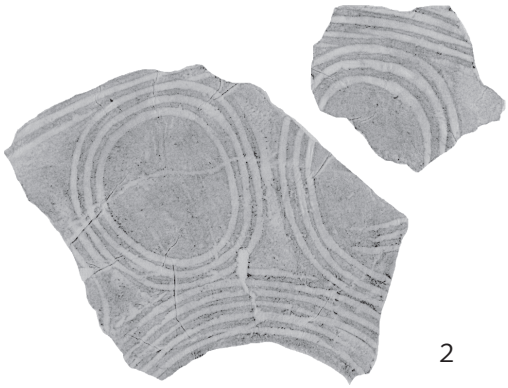
3　銅鐸の文様と土器の文様

前章で、東奈良銅鐸の楕円文と印刻波状文を中心にその起源と系譜を考えたが、次に初期の銅鐸に見られる文様の起源と系譜について論じてみよう。その文様は、斜格子文、羽状文である。また、初期の銅鐸には見られないが、木葉文と流水文についても触れることにする。さらにそれらの文様帯のあり方や文様表出技法を論じたうえで、銅鐸の製作が弥生前期にさかのぼる蓋然性を補強し、

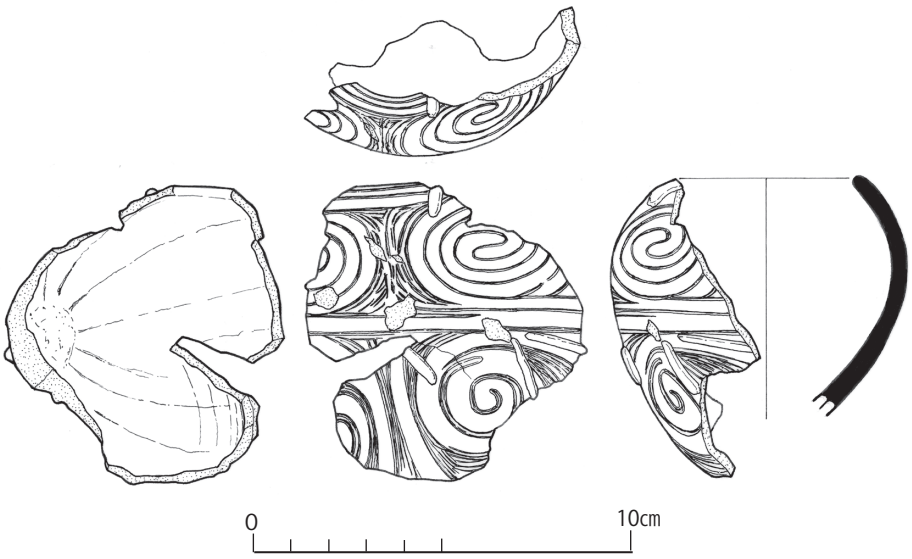


1





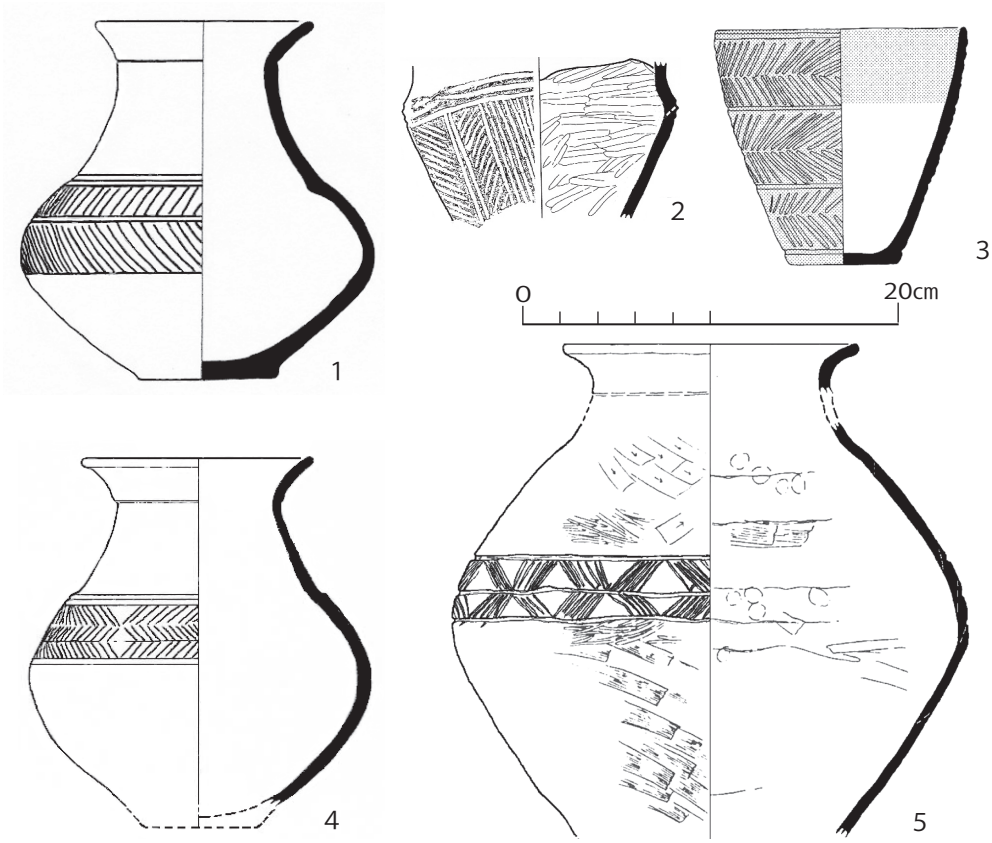
2



3

1は東奈良銅鐸。2は石川県小松市八日市地方遺跡出土土器。３は
愛知県春日井市松河戸遺跡出土の彩文のあるヒョウタン。

図６　楕円文（１・２）と渦巻文（２・３）



1は福岡県藤崎遺跡の板付Ⅰ式土器。2は石川県八日市地方遺跡の柴山出村式土器。3は石川県乾遺跡の乾式土器。4は山口県綾羅木郷遺跡の綾羅木1式土器。5は青森県畑内遺跡の砂沢式土器。3は縄文晩期終末で、他は弥生前期。

図 7　羽状文をもつ土器

次章で東奈良銅鐸に施された楕円文などの問題を再び取り上げながら、それらの文様がもつ歴史的な意義について触れることにしたい。

斜格子文（図 9）　斜格子文は最古段階の銅鐸である神庭荒神谷 5 号銅鐸、東博 35509 号銅鐸、中川原銅鐸や朝日遺跡の銅鐸鋳型など、菱環鈕 1 式銅鐸すべてにわたって認められる文様である。銅鐸の本体を緊縛した帯を表現したという説もあるが、遠賀川式土器に認められる文様モチーフであることも見逃せない（図 9-4）。

遠賀川式土器のこの文様が、韓国の土器や青銅器にあまり見られないとすれば、独自に生み出されたか縄文土器の文様からの流れを受けたものと考えられるが、鳥取県智頭町智頭枕田遺跡の土器（図 9-3）に認められる点に注目したい。智頭枕田遺跡の土器の時期は当地方の遠賀川式土器出現期にほぼ限定されるが、ほかに三田谷文様と関連した縄文晩期前半の北陸系土器の文様モチーフと関係の深いものが出土している。斜格子文も滋賀里Ⅱ式に顕著な文様であるので（図 9-1・2）、こ

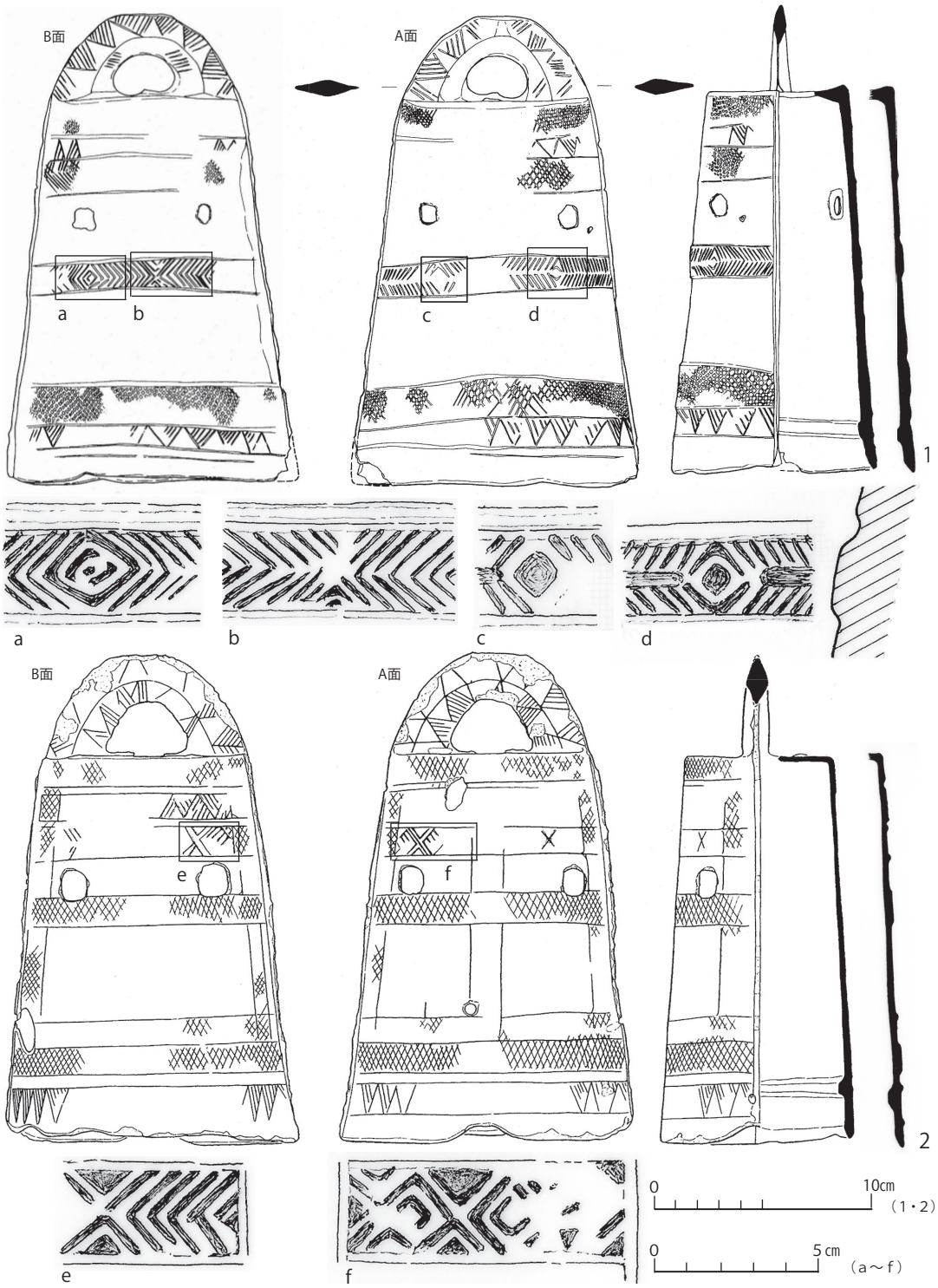


図 8　菱環鈕 1 式銅鐸（1：島根県神庭荒神谷 5 号銅鐸、2：東博 35509 号銅鐸）

れもまた三田谷文様と同様、北陸系の古い文様モチーフの復活とみなすことができよう。

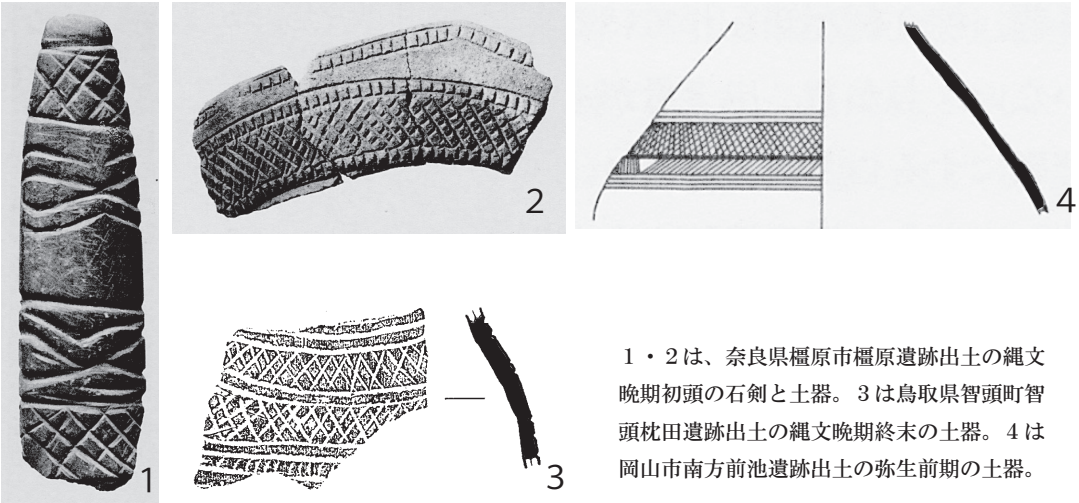
羽状文（図 7）　羽状文は神庭荒神谷 5 号銅鐸にみられる（図 8-1）。無軸の羽状文で、途中 2 か所で方向を変えている。文様があいまいな右側にもその箇所があるだろうから、中心の X 状の反転部 1 か所と重菱形状の反転部が 2 か所となる。遠賀川式土器の羽状文は日本海側で発達するが、このような反転部をもつ羽状文もしばしば認められる（図 7-4）。その影響は青森県南郷村畑内遺跡にまで達している（図 7-5）が、日本海を経由して津軽海峡を回り込み伝播したモチーフと考えられる。

遠賀川式土器の羽状文が、北陸地方の乾式土器という縄文晩期終末の土器の文様モチーフを祖形とするのではないかという鈴木正博の考えは、上述したとおりである。

木葉文　木葉文を施した銅鐸で最も古いのは、福井県坂井市井向遺跡の外縁付鈕 1 式銅鐸である。土器の木葉文は弥生中期に消え去るので、外縁付鈕 1 式銅鐸が中期初頭に位置するとすれば前期末の木葉文との継承関係はかろうじて保たれるが、後述する近年の銅鐸成立年代論との関係からむずかしい問題をはらんでいる。銅鐸の木葉文の出現経緯は今後の課題として、土器と銅鐸の木葉文に継承関係を認める立場からその由来を問題にしたい。

遠賀川式土器の木葉文が縄文土器の影響であることをはじめに論じたのは水野正好であるが（水野 1953）、坪井清足も同じ立場から滋賀里 ― 橿原式の文様モチーフに起源のあることを図解した（坪井 1962：136-138）。橿原式土器と遠賀川式土器の間には開きのあることから、深澤芳樹はその間を消滅しやすいヒョウタンなどに施された彩文によって埋めた（深澤 1989：46）。しかし、橿原文様が晩期前半の限られた時期のものであることから、深澤の間接的影響論も成り立ちがたい可能性が大塚達朗によって指摘されている（大塚 1995：93）。

飯塚和博は鳥取市古海遺跡の縄文晩期終末の東日本系土器（図 10-1）を取り上げ、遠賀川式土



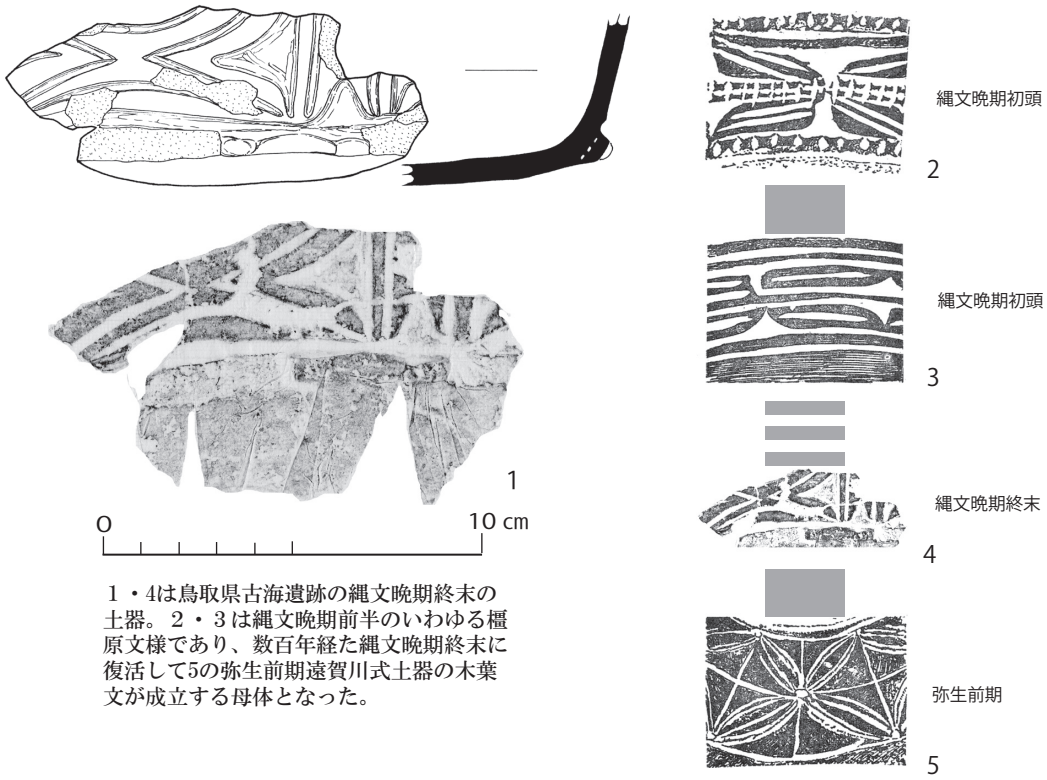
１・２は、奈良県橿原市橿原遺跡出土の縄文晩期初頭の石剣と土器。３は鳥取県智頭町智頭枕田遺跡出土の縄文晩期終末の土器。４は岡山市南方前池遺跡出土の弥生前期の土器。

図 9　斜格子目文（縮尺不同）

器の木葉文の起源を求めた（飯塚 1998）。橿原式との時間的な落差は依然として埋められず、その復活の様相を呈する三田谷文様がまた新たな課題をもたらしたが、飯塚の見解は木葉文の起源のもっとも有力な仮説といえよう（図 10-2）。

流水文　流水文も、菱環鈕式銅鐸には認められず、外縁付鈕 1 式銅鐸に施されたのが最も古い。銅鐸の流水文が畿内第二様式の土器に施された櫛描文に由来することは、佐原真が詳細に論じている（佐原 1960：99・1972：21-22）。佐原がこの中で取り上げたように、土器の流水文は弥生前期にさかのぼり、同様の文様モチーフは、木製品や骨角器など様々なものを飾っている。

流水文に縄文土器の影響があることをはじめて指摘したのは、杉原荘介である（杉原 1950：11）。遠賀川式土器の流水文の祖形である工字文が東北地方の大洞 A 式土器に由来することは確かだが、三田谷文様に系譜が求められる可能性のある資料も存在している。徳島市庄・蔵本遺跡は遠賀川式の集落であり、弥生前期前半の土坑 SK02 から遠賀川式土器がまとまって出土したが、流水文は壺形土器に描かれていた（図 11）。大洞 A 式の工字文を模倣した弥生前期の流水文は反転部を幅広くえぐっているが、この資料は細い沈線による I 字形の反転部を構成していて三田谷文様に近い。報告した中村豊は同市三谷遺跡などに多く見られる縄文系の文様とのかかわりを指摘している（中村編 2010：16-17）。



１・4は鳥取県古海遺跡の縄文晩期終末の土器。２・３は縄文晩期前半のいわゆる橿原文様であり、数百年経た縄文晩期終末に復活して5の弥生前期遠賀川式土器の木葉文が成立する母体となった。

図 10　木葉文の成立過程（2 ～ 5 は縮尺不同）

銅鐸文様の起源　このように、銅鐸文様の祖形の多くは弥生前期の遠賀川式土器の文様に求めることができる。銅鐸の文様と遠賀川式土器の文様に著しい近似性のあることは、すでに戦前小林行雄が指摘したところである（小林 1941：9–12）。問題は遠賀川式土器の文様の由来であるが、そこに三田谷文様という縄文系の文様が大きく関与していたこともうかがえた。つまり、銅鐸文様の多くは間接的に縄文系の文様からの系譜をひいていることが指摘できる。

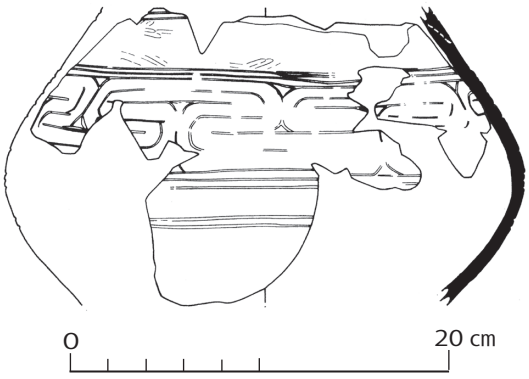


図 11　徳島市庄・蔵本遺跡の流水文土器

そのなかにあって、東奈良銅鐸の文様は直接縄文土器あるいは縄文系土器の文様を取り込んでいるのであり、銅鐸の製作開始年代や集団関係を考えるうえできわめて重要な情報を提供しているといえよう。

文様帯と文様表出技法　菱環鈕 1 式銅鐸の文様は、横帯を基本とする。最古の銅鐸とされる東博 35509 号銅鐸は四区袈裟襷文であり、菱環鈕 1 式銅鐸のなかでは異例の縦の区画をもつ。このような菱環鈕 1 式の文様帯構成の傾向は、横帯を基調としながら横帯間をつなぐ縦線や縦の帯状表現が散見されるという遠賀川式土器の文様帯構成と通じるところがある。

菱環鈕 1 式銅鐸の 3 つは、いずれも横帯を浮き彫り風に仕上げており（図 8–1・2）、神庭荒神谷 5 号銅鐸の段差が約 2mm と最も顕著で、東博 35509 号銅鐸がそれに次ぐほとんど同じ高さで中川原銅鐸が最も微弱であることから、神庭荒神谷 5 号銅鐸➔東博 35509 号銅鐸➔中川原銅鐸の順に変化した可能性が示唆されるのであり、高さもその順に大きくなっていく。一方、春成が言うように鈕の厚さからすれば東博 35509 号銅鐸の方が神庭荒神谷 5 号銅鐸よりも格段に分厚く古い様相を示す。また重菱形文で述べたように、東奈良銅鐸との継承関係もスムーズであることは、神庭荒神谷 5 号銅鐸の方が東博 35509 号銅鐸よりも古いとばかりは言えないことを示しており、この二者はほぼ同時につくられた系列の違う銅鐸の可能性も考えさせる。いずれにしても東奈良銅鐸の突線が幅広く高く作出されているのは、菱環鈕 1 式銅鐸に継承された技法といってよい。

では、この表現の元はどこに求められるのだろうか。荒神谷 5 号銅鐸や東博 35509 号銅鐸の表現方法を観察すると、段の外側の溝状の掘り込みによって段が強調されるが、段の際が急傾斜でその反対側の溝の立ち上がりは緩やかである（図 8-d 右）。この技法は遠賀川式土器の中段階に特徴的で新段階の古い部分に残る、削り出し突帯の技法[4]と共通している。東奈良銅鐸の中央部に間隔の狭い 2 条の突線が認められるが、これなどは遠賀川式土器中段階の壺の頸部にしばしば見られる削り出し突帯に類似する。

4　銅鐸文様の起源論とその歴史的意義

銅鐸起源年代論　本論では小林行雄の銅鐸文様遠賀川式土器起源説を再確認し、さらに文様帯や文様表出技法にまでそれが及んでいるのではないかと考えた。

菱環鈕 1 式の最も新しい段階に位置する朝日遺跡の銅鐸鋳型が、弥生中期前半で初頭にまでは達しない土器と共伴したという事実から、銅鐸製作の開始時期を弥生中期初めころとする春成の見解がある（春成：2007：146）。しかし、朝日遺跡の銅鐸の鋳型が菱環鈕 1 式でも 3 番目に位置することと、それが中期前半であるという定点が設定されたにとどまるのであって、菱環鈕 1 式銅鐸の製作の上限を示すものではない。これだけ多くの文様モチーフが遠賀川式土器に由来していることや、文様表出技法にもその影響を認めてよければ、遠賀川式土器の製作者集団と銅鐸製作者集団の交流―深いつながりが考えられると同時に、銅鐸の生産が弥生前期にさかのぼる可能性は否定できない。

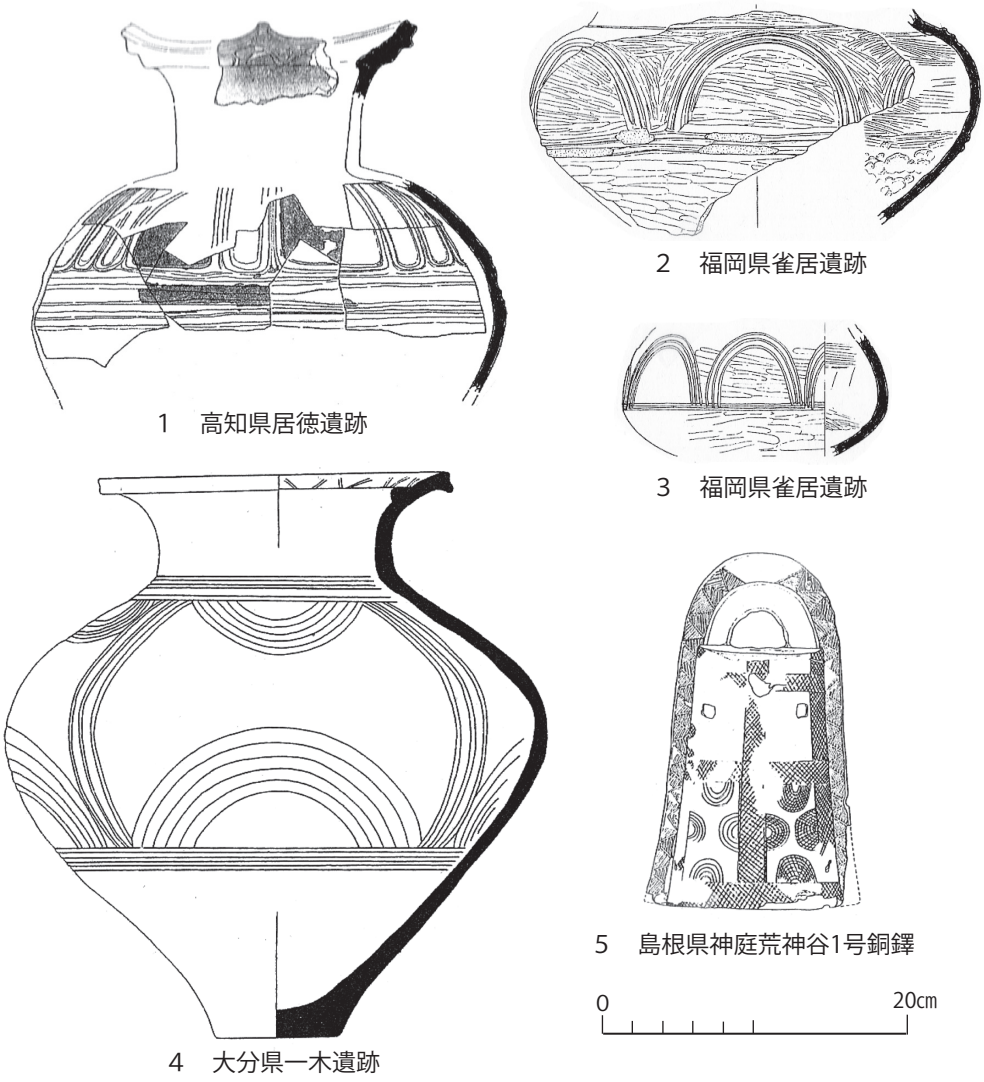
しかし、弥生中期初頭にさかのぼりえない外縁付鈕 1 式銅鐸に、中期の土器にはすでに消失している木葉文が描かれていることからすると、彩文や木器などに転写された木葉文が銅鐸に採用されるという深澤の考え方を採用しない限りその復活をうまく説明することはできない。したがって、遠賀川式土器の文様によって銅鐸前期遡上説を保証することもできないのである。

このような問題はあるが、遠賀川式土器の文様との類似度の大きさや重菱形文のように東奈良銅鐸から朝日遺跡の銅鐸鋳型までに何段階かの変化がたどれることなどに加え、和歌山県御坊市堅田遺跡の弥生前期にさかのぼる可能性のある青銅製鉇の鋳型の存在は、銅鐸生産の開始が前期にさかのぼる傍証である。古い段階の銅鐸は、新しい段階の銅鐸と共伴することがよくある。また、東奈良銅鐸の内面突帯は、裾の端部ともども舌で叩かれ著しいすり減りが認められ（図 1）、長い間伝世して用いられていたことをうかがわせる。縄文晩期の土器の文様から菱環鈕 1 式銅鐸の文様への継承は遠賀川式土器を介して間接的になされたが、東奈良銅鐸の文様は直接的な継承によるもので、そのことから東奈良銅鐸を菱環鈕 1 式銅鐸よりもさかのぼる年代をもった、より縄文系集団との接触が濃い銅鐸と位置づけることができよう。東奈良銅鐸の製作年代が弥生前期にさかのぼる可能性は、依然として高いのではないだろうか。

銅鐸文様起源論の歴史的意義　銅鐸製作者集団と遠賀川式土器製作者集団のかかわりは、たんに時代的な問題にとどまるものではない。それらを構成する文様の多くが縄文晩期に系譜を求めることができることは春成も認めるところであるが（春成 2007：150）、本論で強調したのは縄文晩期終末～弥生時代初頭の西日本一帯に広がる三田谷文様という北陸系の文様モチーフを多く採用していることである。

北陸系の縄文後期末～晩期前半の土器の文様が、なぜ 500 年も経て復活するのか、その意味はよくわからない。ただ、三田谷文様のテクニックを取り込んだ浮線渦巻文 ― 楕円文土器の分布圏の東端が北陸地方 ― 伊勢湾地方であり、このラインは銅鐸の生産を開始した地域のライン（春成

2007：146）と合致していることが注意されよう。浮線渦巻文土器は、愛知県一宮市八王子遺跡のように一つの遺跡から多数出土する場合もあるが、多くは 1 ～ 2 個体に限られており、それも地域の中核をなすような遺跡から出土することが多い。これは銅鐸のあり方と共通する点であり、集団や地域のアイデンティティーを表出すべく銅鐸の文様に縄文系の特殊な土器の文様を採用した結果を示しているのではないだろうか（設楽 2009：92）。渦巻文は松河戸遺跡のように、ヒョウタンという特殊な器物に施される場合もある。



1は東北地方の縄文晩期亀ヶ岡式土器。九州に影響を及ぼして、2の隆線重弧文が成立。沈線になって3の板付Ⅰ式土器（前期）や4の下城式土器（中期）へと続き、5の銅鐸文様に取り込まれた。

図 12　重弧文

木葉文にしても羽状文にしても、一方は伊勢湾地方から福島県域に、一方は日本海から津軽海峡を経由して青森県の太平洋岸にまで運ばれたり影響を与えたように、遠賀川式土器の象徴的な文様モチーフといってよい。ヒョウタンの文様や工字文 — 流水文の遡源としての三田谷文様やそれと関係する楕円文など北陸 — 伊勢湾地方の縄文系の文様が、朝鮮式銅鈴とは全く異なるアイデンティティーの表明として銅鐸に採用されたのである。筆者は小林青樹とともに遠賀川式土器の源流である夜臼Ⅱ a 式土器の文様モチーフに東北地方の大洞式土器の文様要素が取り込まれ、板付Ⅰ式土器の沈線重弧文が成立したことを論じたが（設楽・小林 2007）、同じような現象が青銅器にも生じていたことは、縄文系文化の関与が多方面にわたっていたことを示す現象として注目に値する。沈線重弧文は弥生中期の下城式土器に華々しく展開し、神庭荒神谷 1 号銅鐸に採用されたように、シンボルとしての継承が土器から銅鐸へとなされたのであり、その源流は大洞系土器にたどることができる（図 12）（設楽 2013：66–67）。

山内清男は弥生文化のなかに大陸系の要素、固有の要素とともに縄文系の要素があることを指摘した（山内 1932：48）。弥生文化といえば、青銅器をはじめとして大陸に起源が求められ、政治的な役割をもつなど革新的な部分が評価の対象になり、縄文系の文化要素に対する研究はあまり深められてこなかったとされる。もちろん革新的な部分は重視しなくてはならないが、大陸から伝来しその後の弥生文化の地域集団の統合に大きな役割を果たした銅鐸の性格を考えた場合、そのなかに縄文系の文化が大きく作用していたことは、弥生文化形成の多元性などその歴史的な性格を考えていくうえで示唆するところが大きい。

おわりに

銅鐸は北部九州でも生産されていたが、近畿地方に生産、配布の中心があることは動かない。北部九州は銅矛など青銅製の武器を象徴的な器物として位置付けていたのであり、ある意味で対立的な構図がそれぞれの祭器の分布の多寡の背景に存在していた可能性はこれまでにも説かれてきたところである。

問題は、どこまでその対立的な分布の差異がたどれるのかであるが、難波洋三は銅鐸の祭祀が成立する前に、初期の銅鐸分布圏が何らかの共通の祭祀によってまとまっていた可能性を指摘した（難波 2000）。中村豊はそれを受けて、弥生前期に近畿地方から四国地方で石棒が増加する一方、北部九州から四国地方西部の有柄磨製石剣の分布圏と重なり合いながらも対峙している状況から（図 13）、それが青銅祭器の対立的な分布と重なっているのではないかという問題提起をしている（中村 2004：37–38）。

銅鐸に縄文文化の影響が認められる一方で、有柄磨製石剣や青銅製武器には縄文文化の名残を認めることはむずかしい。それは、九州と近畿地方という朝鮮半島への近さという地理的な条件も含めて、朝鮮半島からの文化の影響を強く受けて縄文文化には存在していなかった専門の武器を取り

込んでいった地域とそれが希薄な地域の差が反映している可能性が考えられる。そのことが、一方で土器の無文化をおし進めていく地域と前期よりも中期に土器の文様が複雑化を帯びてくる地域の差になっているのではないだろうか。

日本列島の青銅器の導入における地域差やそれを取り巻く文化の差－弥生文化の地域差は、西日本においても大陸の文化の受け入れの状況とともに縄文文化とのかかわりという視点から深めていくことが望まれる。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、井上洋一、奥井哲秀、加川崇、品川欣也、高橋健、永井宏之、中川寧、濱田竜彦、春成秀爾、福海貴子、増田浩太、森田克行、湯尻修平、茨木市立文化財資料館、今城塚古代歴史館、東京国立博物館の皆様のお世話になりました。記して感謝申し上げます。

（2013 年 12 月 27 日稿了）

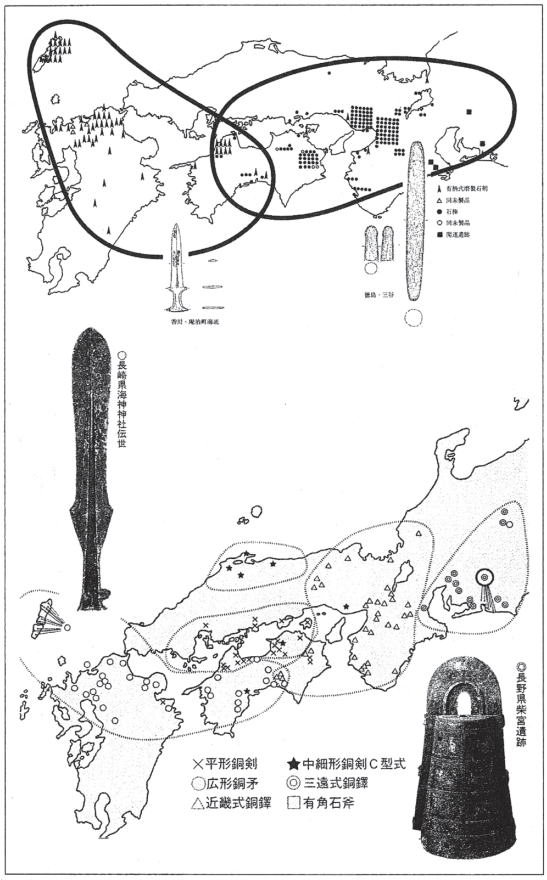


図 13　磨製石剣と石棒の分布と銅矛と銅鐸の分布

註

１) 春成秀爾は朝鮮式小銅鐸の起源を中国の銅鈴に求めたうえで、朝鮮式銅鈴と呼んでいる。朝鮮式小銅鐸という呼び名には、日本列島に本源があるかのような日帝時代のイメージがまとわりついていることからあらためた（春成 2008：55）。筆者もそれにならって朝鮮式銅鈴と呼ぶことにする。

２）森田克行のご教示により観察した結果である。

３）A 面 B 面の呼称は（森田 2002）にならう。

４）佐原真 1967「山城における弥生式文化の成立－畿内第 I 様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置－」『史林』50 － 5、733-757 頁第 3 図参照。

引用・参考文献

飯塚和博 1998「古海式二題」『異貌』16、12 － 21 頁、共同体研究会

井上洋一 2011「銅鐸」『弥生時代（下）』講座日本の考古学 6 、223 － 272 頁、青木書店

宇野隆夫 1982「銅鐸のはじまり」『考古学論考』845 － 871 頁、平凡社

大塚達朗 1995「橿原式紋様論」『東京大学文学部 考古学研究室紀要』13、79 － 141 頁
岡田憲一 2000「三田谷Ⅰ遺跡出土土器をめぐる問題」『三田谷Ⅰ遺跡 vol.3』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ、81 － 84 頁、島根県教育委員会ほか
奥井哲秀・横山成己編 2003『東奈良－東奈良土地区画整理事業に伴う発掘調査概要報告－』茨木市教育委員会
小林行雄 1941「銅鐸年代論」『考古学』12 － 1、1 - 12 頁、東京考古学会
佐原　真 1960「銅鐸の鋳造」『日本Ⅱ 弥生時代』世界考古学大系 2、92 － 104 頁、平凡社
佐原　真 1972「流水紋」『日本の文様 水』9 － 24 頁、光琳社
設楽博己 2004「遠賀川系土器における浮線文土器の影響」『島根考古学会誌』20・21 合併号、189 － 209 頁、島根考古学会
設楽博己 2009a「東日本系土器の西方への影響」『弥生文化誕生』弥生時代の考古学 2、188 － 203 頁、同成社
設楽博己 2009b「弥生開始期の社会変動 東海・関東地方の場合」『東北学』19、87 － 102 頁、東北芸術工科大学東北文化研究センター
設楽博己 2013「東奈良銅鐸の文様をめぐって」『三島弥生文化の黎明－安満遺跡の探求－』62 － 67 頁、高槻市立今城塚古代歴史館
設楽博己・小林青樹 2007「板付Ⅰ式土器成立における亀ヶ岡式土器の関与」『縄文時代から弥生時代へ』新弥生時代の始まり 2、66 － 107 頁、雄山閣
杉原荘介 1950「古代前期の文化」『新日本史講座（古代前期）』2 － 56 頁、中央公論社
鈴木正博 2003「「遠賀川式」文様帯への形式構え」『埼玉考古』38、3 － 23 頁、埼玉考古学会
寺沢　薫 2010「青銅製祭器の出現と変貌」『青銅器のマツリと政治社会』222 － 279 頁、吉川弘文館
中村　豊 2004「結晶片岩製石棒と有柄式磨製石剣」『季刊考古学』86、36 － 39 頁、雄山閣
中村　豊編 2010『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室 年報 2』
難波洋三 2000「同笵銅鐸の展開」『シルクロード学研究叢書』3、シルクロード研究センター
難波洋三 2006「付論Ⅰ 朝日遺跡出土の銅鐸鋳型と菱環鈕式銅鐸」『埋蔵文化財調査報告書 54 朝日遺跡（第 13・14・15 次）』名古屋市文化財調査報告 69、名古屋市教育委員会
春成秀爾 2007「弥生青銅器の成立年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』137、135 － 156 頁
春成秀爾 2008「銅鐸の系譜」『東アジアの青銅器の系譜』新弥生時代の始まり 3、55 － 75 頁、雄山閣
深澤芳樹 1989「木葉紋と流水紋」『考古学研究』36 － 3、39 － 66 頁
水野正好 1953「七宝繋袱状文所謂木葉状文考察」『第五回社会科生徒研究発表会参加論文集』
森田克行 2002「最古の銅鐸をめぐって－東奈良銅鐸の型式学的研究－」『究班Ⅱ 埋蔵文化財研究会 25 周年記念論文集』163 － 179 頁、25 周年記念論文集編集委員会
山内清男 1932「日本遠古之文化六」『ドルメン』9 － 12、48 － 51 頁、岡書院
湯尻修平 2011「浮線渦巻文土器について」『石川考古学研究会々誌』11 － 30 頁

挿図出典

図 1　設楽原図

図 2　設楽 2013（図 2）

図 3　1：森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅱ－』77 － 191 頁木耳社（85 頁 24）、2・3：寺沢 2010（図 85）、4：財団法人大阪文化財センター 1984『山賀（その 3）』（第 52 図）

図 4　設楽 2004（第 6 図）を改変

図 5　湯尻 2011（第 7 図）を改変

図 6　設楽写真・原図

図 7　1・4：小林行雄・杉原荘介編 1989『弥生式土器集成本編』（Pl.1）、2：石川県小松市教育委員会 2003『八日市地方遺跡Ⅰ（第 2 分冊遺物報告編）』（第 10 図）、3：（財）石川県埋蔵文化財センター 2001『松任市乾遺跡発掘調査報告書 A・C 区下層編』（第 97 図）、5：木村早苗 2000「青森県出土の「遠賀川系土器」」『突帯文と遠賀川』699 － 733 頁、土器持寄会論文集刊行会（図 4）

図 8　1・2：末永雅雄編 1961『橿原』奈良県教育委員会（図版第 49・66）、3：設楽 2004（第 5 図）、4：春成秀爾 1990『弥生時代の始まり』東京大学出版会（図 24）

図 9　1：松本岩雄・足立克己編 1996『出雲神庭荒神谷遺跡第 2 冊』島根県古代文化センター（図版 160）、2：春成秀爾 1984「最古の銅鐸」『考古学雑誌』70 － 1、29 － 51 頁（第 1 図）、断面図および a ～ f：設楽原図

図 10　1：設楽原図、2：設楽博己 2013「縄文時代から弥生時代へ」『岩波講座日本歴史 1』（図 1）を改変

図 11　中村豊編 2010『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 2』（第 10 図）

図 12　設楽 2013（図 6）

図 13　設楽 2013（図 5）

The origin of *dotaku* design

Hiromi SHITARA

There are two different opinions about the beginning of *dotaku*, or the ritual bronze bells of Yayoi period: Early Yayoi period (B.C.4C) and Middle Yayoi period (B.C.3C). The former opinion used to predominate, because the earliest *dotaku* had motifs similar to those of Early Yayoi pottery. Hideji Harunari claimed the latter opinion based on the recent excavation at Asahi site, Aichi prefecture, where a *dotaku* mold of the earliest stage and Middle Yayoi pottery were found in a same archaeological context. *Dotaku* excavated at Higashinara site, Osaka prefecture, is appropriate to solve this problem, because it resembles the Korean bronze bells, which is considered to be the origin of *dotaku*. The author concluded that the characteristic oval motifs of the Higahinara *dotaku* were derived from the motifs of the Final Jomon pottery in Central Japan, especially along the line from Hokuriku to Ise-wan. The distribution of the oval motif pottery corresponds to the distribution of the earliest stage *dotaku*. Other motifs of the earliest *dotaku* can also be explained as being derived from the motifs of Final Jomon pottery. The author concludes that the beginning of *dotaku* production dates as far back as Early Yayoi period. It is increasingly required to study the influence of traditional Jomon culture to the Yayoi culture.